

## 「家庭幼稚園」の試み

その意味と考察

東 喜代雄

当狭山ひかり幼稚園では、一九七四年から「家庭幼稚園」と称する実践を続けている。それはほんなことがきっかけであった。村の古老を招いて糸をつむぐ「座ぐり」をやったとき、その功的な手捌きを見ていた一人の幼児が、いきなり老人に向かって「先生！あのさー」と話しかけたのである。ちよつと照れくさそうであったがその老人は、

「なー」と受けてくれた。それを見て、私は「これこそ幼稚園だ」と直感した。

「教育要領」や「設置基準」がなくても幼児のいるところはどこでも「幼稚園になりうる」と考えた。以来二〇年、家庭の全面的な協力を得て中断することなく続けることができた。それは実践することの意味の深さとその効用を確認する営みでもあった。

## 「家庭幼稚園」とは？

読者は「家庭幼稚園」と言っても理解できないと思うので前置きしておきたい。当時私たちは、比較的に子どもたちの生活経験の幅が狭く、交友関係も広がりにくいこと、また母親たちも閉塞的でわが子を近視眼的に理解しがちであること、子育てについては理論や知識は持ちながら、実際面ではどのようなにわが子に接したらよいかわからないというようにな、いわば自信を持ってない状態であることを感じていた。この試みはそうした私たちの課題意識と摸索の中から生まれた。

実践はまず年長組を五、六人のグループに分け、十月中旬から十一月にかけてそれぞれ当番の家を回る。当番の母親または父親は、各家庭の特長を生かしながらそこでできる範囲のプログラムを作り、一日保育者の役割を演じる。もちろん祖父母や、街の人々が先生の役割を担うこともある。グループのメンバーが発表されると、親たちは共同して計画書を

作り、順番を決め、保育の内容を検討する。もちろん事後には報告書を提出する。

以下は、一九九三年に提出されたレポートから「園と家庭、地域との連携」に視点を当てて整理したもので「家庭幼稚園」の試みの意味を考察しようとするものである。つまりこの試みが、じつは幼児の教育とか幼児の発達について貴重な示唆を与えていることを考察しようとするものである。

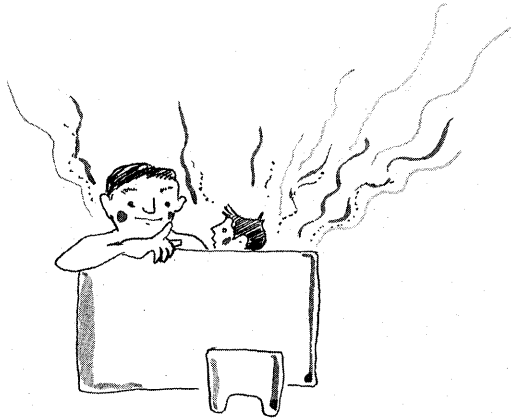
### I. 「近所遊び」のきっかけになっていること

報告書は明らかに、この実践を契機に「友だちの家や、よそに出かけるようになった」「行動範囲が広がった」「泊まりに行くようになった」など交友関係と行動範囲(生活経験)の広がりを表している。

近所遊びは親や兄弟あるいは幼稚園などいわばおとなのいる環境から離れ、異質な遊び友だちとの最初の出会いの場であり、幼児にとって最初の異質化

の機会である。それは幼児が遊び友だちから自己を評価してもらったり、再確認されることにより自我の分化が促進される機会でもある。

いうまでもなく近所遊びの多寡は、幼児の成長に大いに反映していると考えられる。よく遊べる幼児ほどよく発達し、逆にあまり遊べない幼児は発達が



阻害されると考えられる。

この実践はそうした幼児の総合的な遊ぶ力を獲得する一つのきっかけになっている。近くにあるおもしろいところ、カニやムシのいるところ、イヌや動物を飼っているところ：地域で仲間と精一杯遊びほめる場所や空間を見つけたし生かしている。そのような経験は年齢が進むにしたがい貴重な意味として確認されるであろう。

## Ⅱ. ノーマライゼーションとしての親たちの

### 取組

#### 〔事例1・A児の場合〕

A児は自閉的傾向性があるとして市立相談所に週二回通っている。大人との交渉はうまくいくが子どもとの関係はほとんどない。特に状況や環境が変わると不安定になる。一人黙々と絵を描く。

・（この実践に参加しようと）B児が「行こう」と誘うと「行ってきまーす」と言って平気な顔で出



中央はAくん▲

発した。

・初回は園の近くのB児宅が当番だった。そこでは少し手をかけてオーブンで焼くとすぐ食べられるケーキ作りであった。家でB児の母親はAをおんぶしたり抱っこしたりして可愛がった。父親もここにこしながら写真を撮って無言ながら励ましている様子が伺えた。

・第三回はA児宅、自分の部屋やおもちゃをみんなに見せたりして楽しそうであった。

・第六回はC児宅、まず障子一杯に絵具で絵を描き、終わったら障子紙を目茶苦茶に破り、それを撒き散らしながら大声で遊んだ。Aは「Cをやっつけろー」と言って追いかけて、とても楽しそうだった。それ以来AはBとCを探したり後を追ったり、少しずつ遊ぶようになった。

・Aのグループは、同じようにAを仲間として受け入れAの興味や状況にあわせて無理のない実践を続けた。ある母親は「Aくんがかわいくて仕方が

ない」と報告している。

\*

#### 〔事例 2・D 児の場合〕

D 児は、普段は特定の仲間と遊ぶが、気に入らないことが起こると急に怒りだし手がつけられない。癩癩は容易におさまらない。料理とものを作るのが好きである。情緒が極めて不安定である。

・ D のグループの母親たちは、D の好きなことや関心事について何回も話し合った。D の母親と一緒にお茶の会も開いている。

・ このグループでは、①プリントごっこで年賀状作り、②犬の散歩と犬小屋作り、③自宅の庭でお料理作り、④近くの公園に行つて紙飛行機を作つたり飛ばしたり、⑤段ボールで大きな象の形を作り色を塗つて、乗つたり動かして遊ぶなどした。父親の参加も三組あつた。

・ 実践終了後もグループの子どもたちは、D の家に遊びに行つたり、D を家に誘うこともある。

#### 〔考察〕

\*

毎年、心身に障害を持つ幼児を当園では迎えているが、障害を持つゆえにこの実践に参加しなかつた幼児はいない。親たちはそれぞれの幼児をわが子と同じように受け入れ、細やかな配慮を持つて接し、それらの幼児の興味や関心によりそいながら、無理のない計画を立て取り組んでいる。

人間関係がうまくいかず、順番が守れなかつたり、集中しない幼児にも担任や親たちと連絡をとりながら、それなりの対応を真剣にしている。

ハンデキャップを持っている幼児を受け入れることについても、不十分ではあつても、それらの親たちの日常生活や心情に寄り添い、体験的に考えさせられる意味は大きいと思われる。

#### Ⅲ. 面識が、連携を実現していること

〔面識についての調査結果〕（一九九四年一月）

年長組の母親全員にたいして、①年長組の園児、

②その母親、③その父親について面識があるかどうかというアンケート調査をおこなった。ちなみに比較するため同じ狭山市内にある市立P幼稚園の母親に対しても同じ質問の調査をおこなった。両園とも年長組は二学級、園長は同年齢である。(表参照)

\*

「調査の結果と考察」

・園のおかれた歴史、環境、条件などには共通点が多いものの、調査をした面識率においてはかなりの差異があった。

・その理由は通園バスの有無、その他園からのさまざまな働きかけ、あるいは親同士の相互交流の差異が考えられる。

・「家庭幼稚園」の実践が、そのまま下の表の数字に表れたとは思わない。それは当園にとっても単なる点に過ぎないからである。通園の方法をはじめ、さまざまな生活のありようがこの差異を生む

	当園	P園
創立年 (年)	1970	1980
園児数 (人)	158	172
年長児 (人)	58	71
回答率 (%)	93(52通)	96(68通)
①園児面識率 (%)	88.3	39.5
②母親面識率 (%)	91.3	38.5
③父親面識率 (%)	33.6	14.9
通園バス	なし	あり

原因となっていると考えられる。

・しかし「連携」「人間関係」「育ち合い」は、人と人との面識からはじまっていることを考えると、

やはり日頃の触れ合い、特に幼児を媒介とした交流や活動の積み重ねが大きく影響していると考えられる。

・特に母親たちが、園児の父親について面識率が高いのは驚きであった。それは日常の生活から一歩踏み込んで、ある目的のために家族間の交流があることを示唆していると考えられる。

#### IV. 相互交流による育ち合いということ

〔報告書に見られる事例〕

・ M子はTを怖い人と思っていた。Tの家で家庭幼稚園がある日、母親はTの家に犬がいることを知っていてエサを持たせた。M子がTの家についてたちょうどその時犬のロープがはずれ、飛びかかろうとしたのでM子は転んだ。するとTは走りよって犬を叱りM子を助け起こした。

その時以来M子はTを怖がらなくなり、妹を誘ってときどきTの家に遊びに行くようになった。



◀ 友だちのお父さんと一緒に

た。

K子はJ子を誘って、Nの家に遊びに行った。Nは待ちきれなくて遊びに出かけそうになったので、母親が「Kちゃんたち遊びにくるんでしょ。出かけちゃー駄目よ」というと、Nは「いいのいいの、Kたちはお母さんに会いに来るんだからお母さん遊んでいてー」といって出かけてしまった。女兒のいないNの母親は、K子たちの訪問を喜んでいる。

Iコーポ(七〇戸)の幼児はおよそ半数が当園に通ってくる。Q団地(一一〇戸)からは二、三人しか来ない。Iコーポにすむ知恵遅れのY児は、当園には来ないが、あちこちの家に上がり込んで食卓の食べ物に手を出したり、黙って上がってくることもあるという。ところがコーポの人たちは、みんなしてYを可愛がっている。「ずいぶんわかるようになったね」などいいながら。

さて毎年クリスマスには園児たちはペンシルラ

イトを持って讚美歌を歌いながら街々を訪ねる。

Iコーポにいつて歌うと、拍手や紙吹雪が舞い反応が大きい。ところがQ団地では歌い始めると「いま赤ちゃんが休んだところですけどー」といわれたり電灯が消されたり反応が冷たい。

・母親Mはわが子の欠点だけが見えて、長所は全然見えなかったという。いつも「我儘で行儀が悪い」「未っ子で頼りにならない」「粗暴でしょうがない」と思っていた。ところが家庭幼稚園で知り合った母親たちから「元気で明るい」「明るくて意欲的」「よく気がついて優しい」などと聞かされ、わが子を見直したと書いている。

\*

#### 〔考察〕

・事例は多過ぎて書き切れないが、よその子ども、あるいは他人によってわが子の良さや価値、尊さを教えられているところがある。

・親も子どもたちも、他の親や子どもたちを紹介



て、いろいろなことに気付かされ、教えられ、支えられ、育ち合っている様子がうかがえる。

・幼稚園や家庭だけでは獲得できないさまざまな経験や触れ合いを実現している。

## まとめ

「教育は共（協、響…）育、育ち合い」といわれる。私たちはおとな、子ども、教師を問わず、相互の触れ合いによって自分に気づき、自分を少なからず変容させている。相互の交渉や相互の触発を推進させたこの「家庭幼稚園」二〇年の実践も、それなりに意味があったと思っている。今後は今回挙げた項目ごとに、さらに具体的に突っ込んだ事例研究を試みたいと思っている。

（狭山ひかり幼稚園）

## 参考文献

- 「家庭幼稚園の試み」第1報、日本保育学会、一九八五年
- 同第2報、一九八七年
- 同第3報、一九八八年
- 同第4報、一九九三年
- 同第5報、一九九四年
- 上笙一郎他『日本の幼稚園』理論社、一九七四年
- 岡田正章編『フリードリッヒ・フレーベル』フレーベル館
- 小川博久他『幼児の近所遊びと保育』日本保育学会年報、一九八三年
- 谷昌恒『少年たちと生きる』日本基督教団出版局
- 津守房枝『育てるもの目』同出版局

ほか